



2024 年

8 月 第 3・4 週 の 主 日 礼 拝 説 教 要 約

・ 8 月 1 8 日 : マタイ福音書 14 : 22 - 33 .

『 歩いて来なさい 』

・ 8 月 2 5 日 : マタイ福音書 15 : 21 - 28 .

『 パン屑の享受 』

衣笠病院教会 牧師 宮原晃一郎

《 歩いて来なさい 》

古代、モーセに率いられた民（イスラエル）が、エジプト軍の追跡を振り切るために紅海を渡りました。その時、主なる神は海水を「彼らの右と左で壁と」なるようにして、乾いた海底を歩行させました。海底歩行の完了後、海水の“壁”がとかれ、背後に迫っていたエジプト軍は水没し、全滅してしまいます（出エジプト記14章）。この時、神を信じる以外に打つ手のなかった人々は“紅海の奇跡”によって救われたのでした。

さて、今日の聖書は海底歩行ならぬ“水上（湖上）歩行”の場面です。その昔、海底を歩行した時に救われた民の数は数十万人（出エジプト記12：37-38）いたそうですが、今回の“水上歩行者”は弟子のペトロ一人だけです。弟子たちは今、イエスを岸に残したまま沖に出てガリラヤ湖に浮かぶ舟の上にあります。折からの強風で舟は航行不能の状態です。舟には乗らず別行動をとり、祈るために一人で付近の山に登っておられるイエスとの再会の目途が立たず、時は過ぎます。彼らは湖上で身動のとれない状態が続いています。

さて、夜明け前頃になると、湖上に怪しげな人影が見えます。船上の複数の弟子は、元漁師です。水上でそのような“光景”を目にしたことはありません。いや、誰であれ水上に人影を発見すると狼狽し、「幽霊に違いない！」と怖気づきます。

しかし、怪しまれた方のイエスは、直ちに彼らの恐怖心を打ち消しにかかります、「安心せよ、私だ、怖がるな」と。

すると一転、ペトロの恐怖心は立ちどころに消え去り、今度はたわいもない好奇心を抱き、自分に命じて（水上の）そこまで行かせてくれと迫ります。さて、今度はイエスの番です。ペトロに向かって指示を出しました、「（では）歩いて来なさい」。

強風が吹きすさぶ中、ペトロは命じられるが儘に“船外”へと足を踏み出し、歩き始めます。ところが、その直後から、体は次第に水中へずぶずぶと沈み始めます。「主よ、助けてください！」、ペトロがそう叫ぶとイエスは応じます、彼の腕をつかみ、「どうして疑ったのか」、イエスは彼の信仰そのものを問い質したのでした。

ペトロの好奇心に対するイエスの指示は、ペトロの不信仰という結果を招いて終了します。「天からの徴を見せろ、見たら信じてやる」と、イエスに度々迫って来た敵対者らの思い上がりによく似た好奇心を、ペトロも心のどこかに持ち合わせており、窘められる運命にありました。

信仰とは、たしかに揺れ動くものなのかもしれません。神と人との関係が、いともたやすく失われることもあり得ることを、このエピソードはよく示しています。

《 パン屑の享受 》

今日の紛争地域に隣接するテュロスとシドンは共にレバノン共和国の中にあります。この地域の二千年前は、ユダヤやガリラヤと共にローマ帝国の一部であり、どちらの側からも出入りは自由でした。

古代の庶民感覚ではローマ帝国民などという意識はなく、ユダヤ人はガリラヤよりも北側やヨルダン川の東側は漠然と異邦人（＝異教徒）の住む“外国”と認識し、これらの地域の人々も南側や西側には同様の認識を持っていたようです。

その日、北側に“越境中”のイエスに会いに来た、一人の現地の女性がいます。マルコ福音書によると、彼女は現地（シリア・フェニキヤ）で生まれたギリシャ人で、子を持つ母親です。彼女には娘がいて心身を患っています。当時の認識では、「娘が悪霊にひどく苦しめられている」とのことでした。

けれども、この話を聞いて最初に反応したのは無言のイエスではなく同行していた弟子たちでした。彼らもこの女性に負けじとイエスに嘆願します、「彼女を追い払ってください…」と。イエスは先ず、弟子たちの“嘆願”を聞き入れます。そして、そこから歴史的対話が成立します。

先ずはイエスから、「…（イスラエルの）子供たち（ユダヤ人）のパンを取って子犬（非ユダヤ人）にやってはいけない」。すると彼女は応じます、「…でも、子犬たち（非ユダヤ人）も主人の食卓から落ちるパン屑は

いただきます」。イエスはこの時、明らかに女性の返答に心を動かされます。彼女の言葉の中には謙虚さと機知（ウィット）が同居していたからです。ユダヤ人と非ユダヤ人を隔てるガラスの壁は、この時いとも簡単に消滅します。

ヨハネ福音書の1章の14節に、こう記されています。

言（ことば）は肉となって、私たちの間に宿った。私たちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた。

この母親とイエスとの対話のエピソードには、イエスの“恵みと真理と”が溢れ出ています。現場で古くから蔓延していたかに見える、ユダヤ民族主義にともなう彼らの信じる、一方的で“架空”の存在論的優位性（優越感？）は、神の平等の前に、いとも簡単に崩れ去ったのでした。

その時、離れた所にいた彼女の娘の“症状”が、直ちに快方に向かったのだとすると、これを妨げていたものが、本当は何だったのかという疑問は闇に葬られてしまいます。ただ、聖書はその一部始終が、母親の信仰により乗り越えられた出来事であったことを伝えています。